

中国上海 復旦大学日語日文科における日本語教育

茂住 和世*

1. はじめに

1970年代末から始まった改革開放政策により、現在中国は非常な勢いで経済発展を遂げつつある。特に上海市は、中国最大の経済都市であり、多くの外資系企業が進出する国際都市でもある。日本企業の支店・事務所は99年末で827ヶ所、在上海日本人は首都北京よりも多く99年現在6300人を越す^{注1)}と言われており、近年さらなる発展をしつつある。

このような事情を背景に、上海地域は日本語教育機関数、日本語学習人口ともに中国最多であり、高等教育機関での日本語学習者数は高木（文献7）によると1998年現在24万人に達するという。その中においてトップレベルの教育を行なっているのが復旦大学日語日文科である。毎年全員が中国にいながらにして日本語能力試験一級に合格し、上海地域受験者のうちの総合点BEST10に毎年何名も名前を連ねることによっても、当学科は非常に日本語力の高い学生を輩出している教育機関であることがわかる。本稿はそのような教育を可能にしている当学科のカリキュラムや教学面について、現地調査を踏まえてその現状と特徴を明らかにし、さらに日本国内の日本語教育や中国社会の現状と照らし合わせながら復旦大学の日本語教育の抱える課題について考察するものである。

2. 復旦大学日語日文科の概要

2-1 復旦大学の概要

1905年に設立された復旦大学は、中国上海市に140haの敷地面積を持つ、中国国家教育委員会直属の国家重点大学^{注2)}の一つである。2000年4月に上海医科大学と合併した結果、現在は17学院43学部を抱える大型総合大学である。学生数は34000余名、教員は2400余名を数え、構内には彼らの住居も隣接されており、そこには「復旦村」とも呼べる、一つのコミュニティが形成されている。

2-2 日語日文科の概要

復旦大学外国語文学系日語日文科は1970年に開設された学科である。中国では文化大革命期に外国語教育が停止されていたが、71年国連正式加盟、72年日中国交正常化という歴史の流れの中で、大学における日本語学科の設置としては、これは比較的早い時期であると言える。

定員は1学年16名、2002年4月現在64名が在籍している。教授陣は中国人教員9名、日本人教員1名からなっており、中国人教員の内訳は、助教授5名、講師2名、助手2名である。日本人教員は、日本語教育の専門家ではなく、長崎県教育委員会から2年単位で派遣される高校教諭であり、いくつかの担当科目を持つ。

*東京情報大学総合情報学部情報文化学科講師

3. カリキュラム

学科が掲げる目標は下記の通りである。

「本学科は確実な日本語力と広範な科学文化の知識、すなわち外交、貿易、文化、新聞、出版、教育、科学研究、観光等の部門において翻訳、研究、教授、管理業務に従事することのできるハイレベルかつ専門的な日本語を身につけた人材を養成する。

学生に対しては下記のような言語、文学並びに人文・科学技術方面の基礎知識を理解することを求める。

- ・ 充分な異文化間コミュニケーション能力を身に付ける。
- ・ 確実な日本語力と熟達した読み、書く、聞く、話す、翻訳する能力を身に付ける。
- ・ 我が国の国情と日本の社会や文化を理解する。
- ・ 第二外国語を実際的に、応用できる能力を身に付ける。
- ・ 優れた中国語の表現力と基本的な調査研究能力を身に付ける。
- ・ 論理的思考力、創造力、確立した個としてのビジネス能力及び実際の業務遂行能力を身に付ける。」

卒業までに修得しなければならない単位数は、共通基礎課程に当たるもので41、学科専攻の必修科目で100、学科専攻の選択科目で20の合計161単位である。授業科目の配置は下記のようになっている。

[普通教育課程（共通基礎課程に当たる）]

科目名	単位数
マルクス主義哲学原典	3
マルクス主義政治経済学原理	3
鄧小平理論概論	3
毛沢東理論概論	2
思想語彙修養	2
司法学基礎	1
書画教育序論	1
書画書画教育	※左記
美術書画教育	の中ホ
書道書画教育	ら、つ
書道書画教育	を修得
体育(一)	1
体育(二)	1
体育(三)	1
体育(四)	1
軍事概論	1
計算機応用基礎A(上)	2
計算機応用基礎A(下)	2
任意選択	18

※任意選択とは、文系学部の場合は理系学部の科目から（理系の場合はその逆）任意に16単位を修得するというものである。

[学科必須科目]

科目名	開講学期	単位
中国語の読解と作文	1年前期	2
言語学序論	2年前期	2
日本文学史(上)	2年前期	2
日本文学史(下)	2年後期	2
異文化	1年後期	2
日本語Ⅰ(上)	1年前期	10
日本語Ⅰ(下)	1年後期	10
日本語Ⅱ(上)	2年前期	9
日本語Ⅱ(下)	2年後期	9
日本語Ⅲ(上)	3年前期	6
日本語Ⅲ(下)	3年後期	6
日本語読解(上)	1年後期	1
日本語読解(中)	2年前期	1
日本語読解(下)	2年後期	1
日本語会話(上)	1年前期	1
日本語会話(中)	2年前期	1
日本語会話(下)	2年後期	1
日本語作文Ⅰ(上)	3年前期	2
日本語作文Ⅰ(下)	3年後期	2
日本語作文Ⅱ	4年前期	2
翻訳の理論と技術(上)	3年前期	2
翻訳の理論と技術(中)	3年後期	2
翻訳の理論と技術(下)	4年前期	2
日本語訳(日本事情)	2年後期	2
日本語文法	3年前期	2
日本文学史(上)	3年後期	2
日本文学史(下)	4年前期	2
日本新聞概論	4年後期	2
日本文学講義(上)	3年後期	2
日本文学講義(下)	4年前期	2
社会実務※	3年後期	2
卒業論文	4年後期	6

※社会実務というのは、役所・企業等におけるインターンシップのこと。（詳しくは後述する。）

[学科選択科目]

科目名	開講学期	単位
第二外国語(仏語)	3 年 前 期	2
第二外国語(独語)	3 年 前 期	※1
第二外国語(英語)	おとよび 4 つを	
第二外国語(ロシア語)	1 年前期	選択
日本語学	3 年前期	8
日本現代作家と作品研究	3 年前期	※2
歌謡	3 年後期	2
日本文学文法	3 年後期	中ホ
日本古典文学講義	4 年前期	中ホ
日本の映画	3 年前期	つを
同時通訳	4 年後期	選択
日本の経済と貿易	4 年前期	
日本文化史	4 年後期	

以上からわかるように、履修科目の8割近くが必修である。選択科目もカリキュラム上は9科目設けられているが、実際はそのどれもが毎年開講されているわけではないため、学生は結局その年度に選択科目として開講されているものをすべて受講せねばならず、実質的には選択の余地はない。

また卒業単位数も161単位と非常に多いものとなっている。それでも2年前までは174単位であったものが、161単位にまで縮小されたのだという。これも来年には140単位となり、修得単位数は軽減される傾向にある。

実は中国においては日本のような学士卒業要件としての総単位数に関する具体的な基準は定められていない。したがって各科目における総単位数、授業時間などは大学、学部、学科毎に異なっている。黄（文献4）によると、1990年代まで多くの機関において共通基礎科目と専門科目の単位数の配分はおおよそ20%：80%であり、ほぼすべての科目が必修科目であった。そのため、今後は総授業時間の減少とともに、必修科目を減らして選択科目を増やすことで、学生が自主的な学習時間を確保し、自由に広い範囲で学べるよう各大学でカリキュラム改革が行なわれているという。

復旦大学日語日文科のカリキュラムは現在までまさに1990年代までの旧いカリキュラム像を踏襲しており、今後総単位数を減少させることで学生の負担を軽減する方向に徐々に向かいつつある。しかし、教員からは、これ以上授業時間が減ると十分な教育ができないという声が強い。また、選択科目の開講についても、学年定員16名ということから、同時期に複数の選択科目を開講すると、学生が分散し、1クラスの履修者が若干名となって授業運営や効率の面で問題が多いことから、現在の状態を続けるのが妥当という意見であった。

次に、共通基礎課程に当たる部分のカリキュラムを見ると、41単位のうちその半数に当たる20単位（「計算機応用基礎」と任意選択）が、文系の当学科に課せられた理系的科目であることが注目される。これは1999年に交付された政策文書によりすべての大学において全面的に「素質教育」を推進するという学士課程カリキュラムの基本理念が提唱されたことに基づくものである。素質教育とは、大学生の一般的な素質を向上させるために行なわれる、理工系学生に対する人文社会科学教育及び文系学生に対する自然科学教育を指す（黄：文献4）。共通基礎課程単位の半分に割振り振られたことは、中国教育部が大学において「複合型（知識多様型）人材」養成を目指している方向とも合致する。さらに後述するように、入学時に学科定員の約1/3を理系志望の学生から採ることが決められていることも合わせて考えると、復旦大学では文系と理系とのより一層の融合を目指そうとしていると考えられる。

学科専攻科目においては、日語日文科という学科名称であっても圧倒的に「日本語」という言語を習得するための科目が多く、文学関連科目は必修100単位のうち12単位に過ぎない。これは中国の教育が伝統的に実用志向であったこと、また近年の社会状況の中で学生側からも確実な日本語力を身に付けたいという要求が増していることの現われであり、それは学科の掲げる目標にも明確に現れている。また、日語日文科であるのに学科必修に「欧米文学史」や「西洋文化」が含まれているのは、外国語文学系の一学科としての基礎教養として1～2年次に配当されているものと考えられる。それ以外のいわゆる日本語教育に当たる部分は単位数にして74単位、総授業時間数は1100～1200時間が当てられている。これは日本語能力試験一級の認定基準に示される900時間という学習時間に比べればかなり多いが、日本語使用環境ではない海外の学習機関で十分な教育を行なうためにはこのくらいの時間数が必要だと教師達は述べている。

以上見てきたように復旦大日語日文科は非常に多くの授業時間を日本語教育に当てており、そのほとんどが必修科目、かつステップ履修科目である。また、特に1・2年次の教育が非常にインテン

シブに行なわれている。入学直後のゼロ初級からの2年間には講義形式の授業は週数回しかなく、あとは専ら日本語の習得のために精読を中心に据え、会話と聴解により「話す」と「聞く」ことを補強している。これは学生が日本語には日本語で即座に反応できるようになることを目標に（間に中国語での思考を挟まぬよう）、組み立てられたコースデザインで、3・4年次になってから「考える」ことを伴う講読や作文の時間が置かれている。このような1・2年次の徹底した集中教育が当学科の学生に高い日本語力を身につけさせることを可能にしているものと考えられる。

4. 教育・指導の実際

4-1 日本語ⅠⅡⅢ

これは日本語科のメインとなる科目で、内容は「精読」である。つまり、語彙の意味と発音、文法、読解等の総合的な日本語の指導をする科目である。2年後期までの使用教科書は上海外国語大編『新編日語』1～4である。これは日本語未習者を対象にしたテキストで、レベル的には日本語能力試験の2級程度までをカバーできる内容となっている。1課の構成は、本文、会話、応用文、単語、言葉と表現（文法・文型）、ファンクション用語（機能別の日本語使用例）、練習に分かれている。中国語は単語の意味と文法・文型の解説部分にしか用いられていない。練習は、漢字の読み、短文レベルでの空所補充、本文・会話・応用文の内容に対する質問、中国語から日本語への翻訳および日本語から中国語への翻訳という構成である。付属音声テープがない代わりに各新出単語にはアクセント記号が明記されている。扱う内容は日本語や日本人・日本文化についての話から、ニュースや環境問題に関するものまで幅広い。

始めのうちはもちろん中国語を用いて解説・説明や学生への指示を行なうが、だんだんと日本語使用を増やし、最終的には授業中の使用言語を（教師、学生ともに）100%近く日本語のみに行なうようにしている。教室の外へ一歩出れば日本語などまったく使われない環境の中で日本語を身に付けさせるためには、このくらいの厳しさと緊張感が必要だと担当教員は述べている。

このように、日本語教育の根幹となる部分を実力のある中国人教師が担当し、2年間で確実に学生を日能試2級レベルまで導くことができることが当学科の強みである。本当に高い語学力がなければ直接法で教えることはできない。また、日本人日本語教師では学生から中国語による説明を求められた時対応しきれないこともあるが、中国人教師であればその問題もない。加えて、復旦大学という偏差値が非常に高い大学の学生であること、入学定員16名という小人数であることもその教育効果をさらに高めていると言える。

一方、3年次の精読は日本人教員が担当であり、担当の教員によって内容が違っているが、たいは日本の文学作品や、日本の中学・高校の教材から取ったものを用いている。

4-2 その他の日本語関連科目

「読む」ことのほかに「書く」「話す」「聞く」という技能を伸ばすために日本語聴解、会話、作文の授業が設けられている。担当は中国人教師であり、テキストなどの教材の選択もシラバスもその年度の各担当教師に任されている。

日本概況(日本事情)と日本文学史の担当は日本人教員である。テキストは担当しているその教員が自分で作っている。

日本語文法のテキストは教員によって異なるが、日本の国語概論に当たるものを使用することが

多い。

このように、メイン科目である「日本語ⅠⅡⅢ」以外の日本語関連科目は、日本語ⅠⅡⅢで学習した内容を聞いたり、話したり、書いたりすることによって再確認し、インプットされた知識がアウトプット可能になるような補助的役割を負っているといえる。

4-3 社会実践

3年次後期に当たる6月中旬からの2週間、日本でいうインターンシップが必修単位として全学生に課せられる。これは中国の全大学にて行われているものである。実習先は基本的に学生が自分で探し、実習後の評価は大学所定の「評定書」に実習先の責任者が記入・捺印をし、学生はそれを各学部の学生課に提出した時点で成績と単位が認定されるというシステムである。学生はこの機会に自分の専門や将来の希望と関係のある実習先を見つけて、実際に自分はどんなことができるかを自己チェックでき、他の人からもチェックをしてもらうことで、卒業後の進路をより具体的に考えるようになるのである。

日語日文科の学生の実習先は、日系企業、マスコミ関係や企業・役所の国際交流部が多い。先輩からの紹介等により、実習先を見つけることはさほど困難ではないと言う。仕事内容は翻訳などの事務的仕事が与えられることが多い。大学側はこの社会実践に向けて特に何の指導もアドバイスも行なわない。学生は上級生になると、日本人留学生と接したり、日本語ガイドのアルバイトをするなどの日本語使用場面を経験するが、この社会実践という機会に、企業・役所等で自分の日本語力が使い物になるかどうか試される。実際に社会実践を終えた当学科4年次の学生にインタビューしたところ、この時与えられた仕事にはさほど困難を感じなかったと述べていた。^{注3)}

島田・渋谷（文献6）は、中国大連での調査で、日系企業が現地社員に求める日本語ニーズは、電話の取り次ぎや業務上の文書・書簡・FAXの翻訳が多く、商談・交渉やプレゼンテーションができるところまでは望んでいないと述べている。このことから考えると、2週間程度の社会実践の学生には企業側はこれらよりもずっと軽い仕事しか与えていないはずであり、したがって学生は言語的挫折を経験することなく社会実践を終え、残りの1年を日本語能力試験一級という資格の取得と就職活動に向けて歩を進めるのである。

4-4 卒業論文

卒業は6月末であるが、テーマ提出はその前年の11月頃となっている。しかし、実際はなかなか決まらずに1月から2月頃ようやくテーマを提出して来る学生がほとんどだと言う。日本のように1年近くかけていろいろな資料を集めて書く、ということができない、つまり中国において手に入る資料がほとんどないというのが現状で、したがって論文自体がお粗末なものでも仕方ないと考えられている。分量は500字詰め原稿用紙で15枚で、すべて日本語で書くことが定められている。

5. 当学科の抱える課題について

5-1 カリキュラム

谷部（文献9）によると、中国の大学における日本語専攻科は、従来までの実用本位の外国語教育から①日本語学の専門性の確立へ②日本語以外の専門的知識の習得へ、という二つの流れが生まれつつあるという。①の流れでは日本語を体系的な学問として位置付け、今までの運用能力に加え

て日本語の理論・知識を身に付けさせようというものだ。

日本の大学での日本語専攻のカリキュラムの例として、東京外国語大学外国語学部日本課程の開講科目を見てみると、日本語の理論・知識を学ばせるものとして、音声学・音韻論、語彙論、構文論、日本語文法、日本語史が置かれている。現在の復旦大カリキュラムの中でこのような日本語という言語についての科目は、必修科目で言語学序論・日本語文法、選択科目で日本語語彙学の計3科目に過ぎず、体系的な専門科目の配置が欠けていることは明らかだ。その背景には、現在の日本語科の教員が文学畑の出身であること、学生や社会のニーズがいまだ実用本位であることがあり、今後しばらくはこの状況が変わらないことが予想される。

また、日本語という特定の言語についての専門科目以外に、東京外大では言語教育に関わる科目として、言語学、言語社会心理学、対照言語研究、第二言語習得研究が置かれ、その他、日本地域研究、日本文化論、日本近現代史という科目も用意されている。このような、日本語を専門的に学ぶための周辺理論や、日本という社会についてのより深い探求も復旦大の現行カリキュラムに大きく欠けている部分である。

谷部の指摘する②の流れは、日本語を手段として日本語以外の専門、例えば経済や貿易などを身につけさせようというもので、二つの学士の取得を目指したり、日本語科の中でコースにより、文学士または経済学士が取得できるようにするなどの方向がある。総合大学である復旦大ではこの「双学士」制度が認められているが、日本語科のように学科必修科目が100単位もあり、積み上げ型のステップ履修中心のカリキュラムでは、他学部の講義を履修してもう一つ学士を取得することは事実上不可能である。

以上のような事情から復旦大の日本語科は従来型の実用の学としての日本語教育が続けられている。しかし、学科学目標に掲げられた「ハイレベルの日本語力」を身につけた、実社会で活躍できる人材の養成を目指すなら、さらに異文化間コミュニケーション関連科目や社会心理学などの科目も設ける必要があるだろう。また、ビジネス用語やビジネス慣習なども含めたビジネス日本語科目や、日経新聞などを読みこなせるような商業・経済日本語科目などを選択科目として置いてもいいだろう。

当学科がいずれの方向にシフトするにせよ、大学教育全体が総単位数を圧縮する傾向にある中で、何を必修科目として残し、どのような選択科目を置き、また限られた授業時間数でどのように学生の日本語力を高めていくのか、そして、復旦大としてどのような人材を育てていくのかは今後の大きな課題である。

5-2 シラバスの問題

当学科の開講科目のうち、日本語ⅠⅡは使用テキストから見てそのシラバスは構造シラバスであることは明らかである。その他の「会話」「聴解」「作文」および日本語Ⅲについてはそのシラバスは明確でなく、毎年担当する教員の裁量で授業が進められている。しかし、これらの科目は必修科目であり、日本語運用力を高めることに直結する授業であるため、本来は学科としてシラバスが決められるべきものである。

日本国内の教育機関においては、大学進学のための予備教育、中国帰国者のための日本語教育、年少者に対する日本語教育、ビジネスピープルに対する日本語教育など、その学習者のニーズに合わせてメインテキストが選ばれ、「話す」「聞く」「書く」こともそれぞれの到達目標に最短距離で近づけるように、タスクシラバスやトピックシラバスなどが組み合わされて構成されることが多い。

復旦大の教育目標は日本国内のような学習者のニーズに合わせたものではなく、「ハイレベルな日本語力を身につける」というものであるため、会話・聴解・作文等の科目でタスクシラバスを立てるのはそぐわないかもしれない。とするなら、構造シラバスの欠点を補うような機能的シラバスを導入することが、日本語運用力を高めるために有効であると思われる。そのためにはそれに適した教材・テキストや、担当教員全員のコンセンサス、そしてコースデザインができる日本語教育専門家が必要となってくるが、いずれも現在は充分ではなく、これらの科目のシラバスを学科全体で見直そうという動きはまったくないのが現状である。しかし、今後総単位数の削減に伴い、授業時間が減少する中で、現在のような担当教師任せのシラバスでは学習効率が落ちてしまい、卒業時の学生の日本語レベルを従来通り維持するのは困難になってしまうだろう。日本語科目相互の関連を考えたシラバスデザインを組み立てることが望まれる。

5-3 教育・指導の問題

復旦大の中国人日本語教員の日本語力は非常に高く、ともに話していても母語干渉による発音や表現の乱れもなく、中国人であることをまったく感じさせない。であるから授業中に彼らから発せられる日本語は学生に対する正確な音声刺激であり、直接法に近い授業も可能となっている。しかし、日本国内での教育と異なり、学生が習った日本語を発する機会は講義時間内に限られており、授業中に教師の質問に日本語で答えるだけではとても十分な練習とは言えない。そこで用いられる方法が「暗唱」である。学生は各課の学習が終わった後本文を丸暗記し、次の日の授業の冒頭に黒板の前に立ってそれを披露する。それは必ず宿題として毎課終了時に全学生に課せられる。これを厳しく行なうことで、日本語を使用する環境でないところにおいても確実に日本語力を付けることができると教師達は口を揃えて言っている。

暗唱は本当に効果的な方法なのか。「暗唱することによって文章の言い回しを覚えられる」「わからなくて頭に入らない語も何度が暗唱しているうちに記憶に残るようになる」「美しい文章を身に付けることができる」と山口（文献10）は中国の学生の暗唱についての考えを紹介した上で、実際は初級のうちはよくても中上級になるとかえって暗唱は弊害をもたらすと述べている。それは例えば、読解において文章の細かい語にこだわってその文章の大枠や文章の裏にある筆者の考えをつかもうとしない傾向を生み、作文においてはいろいろな人の文章をつぎはぎしたように言葉の調子がバラバラになる原因となっていると山口は指摘している。確かにこのような傾向は中国人日本語学習者に見られるものである。実際に復旦大の学生の読解や作文に接したわけではないので、山口の指摘するような暗唱のマイナス面が当学科の学生に見られるのかどうかはわからない。しかし、海外での日本語教育において学生のアウトプットの機会をどうやって作るのかは大きな課題である。その一つの方法として暗唱は最も簡便な手段であるが、その他、多読・速読により文章全体をつかむ練習をする、わかりやすい文章とは何かという表現技術についての指導を行なうなど、暗唱に頼らない日本語の学習方法も並行して用いることが望まれる。

また、日本人母語話者との会話・討議の機会を設けるのも日本語での本当のコミュニケーションを経験する機会として有用である。当学科には日本人教員が派遣されており、3年次の精読や日本概況（日本事情）、日本文学史の講義を担当している。しかし、知識伝達型の講義という形式ではなく、一人の日本人として学生たちと対話する時間を別途設けることは、彼らが自分の考えを日本語で表現する非常に良い訓練となるだろう。時には当学科教員の知り合いの日本人をゲストスピーカーとして招き、ディスカッションをするなど、与えられた日本語を口に出す「暗唱」ではなく、

自分で組み立てた日本語を口に出す機会をもっと増やすことでその弊害を補うことはできるのではないだろうか。

5-4 教材・設備不足

中国の日本語教育現場で教育上の問題点であると教員側が認識しているのが、教材と設備の不足という点である。これは国際交流基金の調査によると、在中国の半数以上の機関で問題点として挙げられているものである。

復旦大学も例外ではない。まず教員の研究室は全部で二部屋しかなく、片方の部屋に昨年ようやくエアコンが設置された。(ちなみに大学の教室や事務室には暖房すらない。)書棚には10年以上も前の雑誌が数冊あるだけで、他には何も入っていない。テキストや辞書、参考書等は教員の私物であるため、全て自宅に置いてあるということだ。LL教室はもちろん、テープレコーダーやビデオデッキもなく、ヒヤリングの授業の時は教員が自宅用のラジカセを持ってきて使用する。そして、使用不能のパソコンが1台埃をかぶったまま放置されていた。

教材の不足も著しい。中国国内で販売されている日本語教科書は、復旦大が使用している『新編日語』と中国人民教育出版社と日本の光村図書との合作である『中日交流標準日本語』の2種類しかない。いずれも中級半ばまでの語彙や文法しかカバーしておらず、これより上のレベルを教えられるテキストはまったくない。また、日本語の副教材としては北京外国語大学編『日本語会話』があるだけで、その他は日能試用の対策問題集か、一般学習者向けの簡略化されたテキストしかない。日本で出版された教科書も大型書店の店頭の数冊並べられているが、当然他の書籍に比べ非常に高価である。

大学図書館においても日本語関連の蔵書はほとんどなく、あっても非常に古いものばかりである。(もっとも、日本語関連のものだけが古いのではなく、その他の蔵書もどれもとても古いという印象を受けた)

以上のような教材・設備不足は教員・学生双方にとって問題である。教員は、日本語の教材・教授法に関する最新の情報を収集したり、コンピューター・カセットテープ・OHP等の機材を充実させることを望んでいる。また日本語図書資料、日本関係図書資料を充実させることは、日本語専攻の学生のみならず、非日本語専攻の日本語学習者にとっても有用である。変化の激しい現代の社会情勢に対応した日本・日本語関連情報を素早く、簡単に手に入れることができるようになれば、カリキュラムにも変化が現れ、さらにきめの細かい教育が可能になるだろう。

しかし、この問題の解決のためにはまず金が必要である。復旦大は重点大学の一つであるため、他の大学とは比べ物にならない多額の予算^(注4)が中央政府及び上海市からつぎ込まれている。中央政府は復旦大に対し、世界的な一流大学のレベルに追いつくことを求め、上海市政府は復旦大が上海市の経済・科学技術と文化の発展の牽引車となり、一流都市の建設推進に資することを要請しており、それらを踏まえて復旦大は研究志向型大学への転換を目指すこととなった(熊：文献3)。しかし、このような情勢の中で、日本語科を含む外国語学部への予算は一向に増えることはなく、毎年いろいろ申請しても大学当局に認められるものはごくわずかであるという。こうした状況を改善するためには日本からの積極的な支援が是非とも必要であるが、国際交流基金の教材送付ですらも届いていないのが現状である。

5-5 日本語科に入学する学生たち

復旦大学は上海地区で実質トップレベルの大学であるため、そこに入学してくる学生は非常にまじめで優秀である。しかし、日本語科を第一志望として入学してくる学生は実際にはごくわずかである。それは以下のような中国の大学入試制度のためである。

中国の大学に入学を希望するものは全国レベルで行われる大学入学のための統一試験を受験しなければならない。この点数により合否が決定され、大学毎の入試というものは行われない。

受験生は受験時に入学希望大学名を志望順に記入し、また各大学毎に志望学科名を4つまで申請することができる。さらに、「志望学科以外であっても当該志望大学であれば他の学科でも構わない」という一文に対し、同意するかどうか記入することになっている。

大学側は合否を決める際、統一試験の点数により、まず足切りを行う。次に、志望学科毎に得点の高い者から合格させる。定員に余裕があればその学科を第2志望にした者の中からまた得点の高い順に採っていく。第4志望者まで入れてもまだ空席がある場合は、入学志望書で「他学科でも構わない」に同意した者の中から成績のよい順に入れていく、というシステムなのである。

また、大学の方針として、文系学科は定員の1/3を理系の受験者から採るということが決められており、日本語科の場合16名のうち5名を理系志望の学生から選ばなければならない。

このような仕組みにより、第1志望の復旦大学には入れたものの、志望する学科とは全く異なる学科に入学してしまう者は大勢出てくる。これは受験生本人の志望分野を中心に進路を選ぶことよりも、復旦大というトップブランドの学生になることを親が強く望むためである。日本語科の場合、このような不本意な形、つまり復旦大学には入学できたが自分の第1~4志望のすべての学科には不合格となり、まったく志望していなかった日本語科に回されてしまった、という形で入学してくる者が以前は多かったという。今は(理系志望だった5名を除き)そのような学生は少なくなったが、依然として日本語科を第1志望として入ってくる者は少ない。それは、復旦大学は非常にハードルが高いため、日本語科への確実な入学を希望する学生は他大学を志望してしまうからだという。

こうして入学してきた学生は1年の前期のうちはやはり落ち着かないという。元々優秀な学生なのでやがてはきちんと勉強するようになるが、学習動機が均質でない学生を同じように教えていくのは大変なことに違いない。今のところ予定はないそうだが、今後もし学科定員を増やすことになればさらに不本意(学科)入学者が増えることとなり、今まで通りの教え方では学科運営に支障をきたしかねないだろう。

5-6 教師に係る問題

岡本(文献8)によると中国における日本語教師の人材不足は依然解消されていないと言う。それは具体的には①教師の待遇がそれほどよくないため、待遇の良い外資企業に転職してしまう②日本語を学んだ学生たちは留学や外資企業への就職を選ぶ③現職教員が日本への留学または研修後、帰国したがいらないという事態に陥っている。

復旦大学日語日文科の場合も教員の待遇は決して良いものではない。研究費や学科予算のようなものは大学から一切支給されない。よって教材はすべて自腹で購入せねばならないが、給料も抑えられているので、どの教員も空き時間はアルバイト(他の教育機関での日本語教授)に携わっている。時には一日に何箇所も教えに回っており、物価水準の高い上海において充分な収入を得るために非常に忙しいのが現状である。

彼らの給料が充分でないのは、物価上昇のスピードに教員の給与が追いつけないことの他に、中

国の大学における教員評価とも関係がある。中国では1995年の「中華人民共和国教育法」により、すべての高等教育研究機関が法人化され、大学は産業界と手を組み、「校弁企業」と呼ばれる大学による企業運営による資金調達が可能になった。このことは地域に必要な人材育成と研究成果の実用化を促進したが、一方で教員の研究成果がどのくらい産業化されたかを教員評価として給料に反映させるようになり、同じ大学の教員でありながら給料に10倍以上の格差が生じる結果となった（遠藤：文献1）。このような教員評価システムでは語学系教員は浮かばれない。いかに優秀な学生を社会に送り出しているかについての評価がなされ、それが給与の改善につながるものが求められる。

ただ、彼らは復旦の教員であるということに誇りを持っているので、大学を辞めて民間企業に就職しようという教員はいない。しかし、日本語の教員であった者が得意の日本語を活かして、国際政治や国際金融などの研究者の道へ進み、結局そちらの方が出世が早かったりすると、日本語科にとどまっている教員には複雑な思いがあるようである。

また、上記②のように、日本語科の卒業生が日本語教員にならないというのは復旦大学においても同様である。上海において復旦大学卒というブランドはその優秀さゆえに企業にとって文句なく欲しい人材である。日系企業にとって、日本語ができる人材は慢性的に不足している状況であり、まして復旦大の日本語学科卒ともなれば完全な売り手市場である。80年代まで、大学卒業生は職業選択の自由がなかった。卒業すると国家により就職先を「配分」され、数年の勤務を経ないと転職することもできなかった。その後市場経済が導入され、国営企業が次々と民営化されることに伴い、「国家統一配属」の制度は崩壊し、現在のように学生は自分の進路を様々な方向で考えることができるようになった。このような状況を考えれば卒業後に日本語の教員になろうと考える学生が現れてこないのもやむを得ないと言える。

仮に大学院に進学したとしても、復旦の日本語科には修士課程しかないため、学位を取るためには他大学に行かねばならないが、中国で日本語のドクターが取れる大学はわずかしがなく、それ以外は日本へ留学する道しかない。中国では最近になって学位を取得しなければ、大学教員になれないという国家からの指示が出たため、現在の教員達（4、50代が中心）が退官または転属した後の後進が育たないことが予想されるのである。

6. おわりに

1999年の中国のGDPの伸び率は前年比7.1%と非常に高いが、上海地域のそれは10.1%とさらに高い^{注5)}。一方、中国の普通高等教育機関の粗就学率は1990年には3.4%に過ぎなかったが、2000年には11%に達し、この勢いでは2005年には15%に達する見通しだという。これも上海地域に限れば2000年のその就学率は37%にも及んでいる（袁：文献2）。このように中国の中でもいろいろな意味で突出した都市である上海地域において復旦大が周辺の人材や企業を巻き込んで今後ますます発展する中で、日語日文科はどのような形で社会に貢献する方向を目指すのだろうか。

現在当学科の教員は、一つの試みとしてある日系企業の新入社員教育としてのインテンシブな日本語教育を請け負い、1年後には日本へ行ってSEやプログラマーとして働ける人材の養成に携わっている。社員の多くは復旦大の理工系学部の卒業生だ。この試みは日語日文科の教学とは今は直接の関係はないが、やがてここでの取組みが大学の教育にフィードバックされ、新たな流れを生む可能性もある。これからの当学科の変化を引き続いて追いたい。

今後は、復旦大学の日本語教育が上海地域の日本語教育に占める位置についてより明らかにするために在上海の大学やその他の高等教育機関の日本語科との比較を行なう必要がある。また、復旦大学での英語教育の現状が日本語学科とどのように異なっているのか、同じような問題点を共有しているのかについて調査してみると、中国の大学における外国語教育への取組みの中での日本語教育の現状と課題についてもさらに考察を深めていきたい。

付記 本研究は学術フロンティア研究プロジェクト1「アジアの環境・文化と情報に関する総合研究」の下で行われた調査研究の一部である。

謝辞 本稿を作成するに当たり、復旦大日本語教員である周昭考先生、茂志春先生、彭應中先生には資料の提供及び長時間の聞き取り調査に御協力いただいた。お忙しい中快く時間を割いてくださった先生方に改めて感謝の意を表したい。

【注】

- 1) 文献11『上海情報ハンドブック2001-2002版』のデータによる。
- 2) 中国教育部直轄の北京大学、清華大学、中国科学技術大学、南京大学、復旦大学、上海交通大学、西安交通大学、ハルビン工業大学、浙江大学の9大学を指す。
- 3) 2名の女子大生にインタビュー。1名はNHK上海支局にて新聞の整理や翻訳（日本語から中国語）、もう1名は日系コンサルティング会社でタイプ入力、資料整理、翻訳（中国語から日本語）の仕事を経験した。両名とも日本語能力試験1級には合格できるレベルである。
- 4) 重点9大学を世界水準の高等教育機関に育成する計画（江沢民主席の「世界一流大学作り」提案）により、復旦大には3年間（1999～2001年）に12億元（180億円）の予算がついた。
- 5) 注1) に同じ

【参考文献】

- 1) 遠藤誉「中国の大学改革の現状－「知識経済」の駆動力になっている校弁企業」『IDE－現代の高等教育』441 2002.8.
- 2) 袁連生「高等教育の大衆化と機会均等性」『IDE－現代の高等教育』441 2002.8.
- 3) 熊慶年「大学改革の課題と大学研究センター－復旦大学の事例」『IDE－現代の高等教育』441 2002.8.
- 4) 黄福涛「大学カリキュラムの日中比較」『IDE－現代の高等教育』441 2002.8.
- 5) 国際交流基金日本語国際センター『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査』1998
- 6) 島田めぐみ・洪川晶「アジア5都市の日系企業におけるビジネス日本語のニーズ」日本語教育103 1999
- 7) 高木航「当地における日本語教育」『中国経済』2001.6.
- 8) 岡本佐智子「中国における日本語教育の発展と定着に向けて」本名信行・岡本佐智子編『アジアにおける日本語教育』三修社2000
- 9) 谷部弘子「中国の大学における日本語教育の質的变化－言語教育と専門性」日本語教育103 1999
- 10) 山口隆正「中・上級における暗唱の弊害－「語」から「言葉」へ－読解・作文に関する弊害」拓殖大学論集 人文・自然科学3 (2) 1995
- 11) (財) 横浜産業振興公社編『上海情報ハンドブック2001-2002版』蒼蒼社
- 12) <http://www.fudan.edu.cn> (復旦大学のHP)

